

山根荘神楽公演解説プログラム批評

平成30年12月13日、毛呂山町老人福祉センター山根荘において行われた神楽公演プログラムを拝読した。今回も、神楽公演のプログラムと言いながらも異質なものであり、観客への補足資料に収まらない内容と存在感であった。

そもそも、今回の公演については企画自体が今までの公演とは異なる性質を持っている。

これまでの江戸里神楽公演では、その多くが劇場を舞台とし、また、神楽公演として観客を募って開催して来た。しかし今回公演については、もとより各種講座の開催に取り組んでおられる施設の企画として、既存の流れの中にお迎えいただいた状態にあった。観客層としては、神楽公演よりも、既存の講座参加者に属する方が多いと考えられる。つまり、常であれば、芸能か伝統文化か、あるいはもっと別の観点から、江戸里神楽に対して何かしらの興味を持った観客により公演が支えられているところを、今回公演については、より様々に拡散する興味を根拠として参加された方に向けて行われたと思われたのだと推測できる。

さて、では今回のプログラムは、万人受けする広く平たい神楽紹

介になっただろうか、と思い読み進めた。しかしそこはさすがの実行委員会、神楽演目の紹介から始まったと思いきや、それに続くのは新しい切り口での座の記録と分析、継承団体について取り上げるコラムとインタビュー、里神楽に携わる神楽師が日本舞踊に取り組んだことについての、神楽師本人の言を核とした記述。神楽ファン向けの神楽公演として考えたとしても新しい、一味違う視点を盛り込んでいた。

まずは、公演プログラムらしく挨拶が掲載され、企画の趣旨や経緯を示しながら、公演への流れが作られる。今回は、企画団体である毛呂山町老人福祉センター山根荘と、演者である大宮住吉神楽保存会からの挨拶文により、今回の講座の位置づけがわかる。

これに続くのは、神楽演目の紹介であるが、このあたりから既に一筋縄では行かない、通常イメージする演目紹介とは少々様相が異なる展開が起こる。当日披露される演目のストーリーや見どころが提示されるかと思いきや、演目についての神話としての位置づけや、神楽師により演目組み立て段階への言及が為されているのである。

披露される神楽について誰もが理解できるよう書かれた文章かと思いきや、披露される神楽について、観客一人一人が積極的に理解

し、自己で整理分析するための手助けをしている。どうやらこの公演は、ただ受け身で神楽を見るだけの会ではなかったようだ。

その後、演目の紹介は「座の場面」と「時間」、「楽」の要素により整理され示される。時系列順に演目内容が示されており、当日の神楽が示すストーリーを追うことが出来る。当初イメージしていた演目紹介はここで果たされる。神楽のストーリーについて補足が欲しい観客がいれば、その要望に十二分に応えてくれる部分となっているだろう。

しかし、実際には、ある日の神楽観賞のサポートに止まらない資料が提示されている。何しろ、通常であれば神楽師の中にとどめられ、第三者からの記録・言語化が図られにくいであろう、神楽を行う側からの視点が中心に据えられる。また、その部分に要する時間の配分や、座ごとの楽が整理されていることも興味深い。

芸術作品として舞踏等を扱う場合、整理される項目として場面転換を基準としたストーリーや時間的な整理、使用楽曲は比較的基本的な項目として思い当たるだろう。しかし、神楽を題材とした場合、神事的な面や地域との関わり方など、神楽そのものの置かれた現状や、神楽という活動そのものの整理が行われることが多いように思

う。神楽に芸術作品としての分析が不要であるという事ではない。他芸術作品と同じく、その内容についての整理がなされることは重要であり、演目継承の面でも資料化の重要性を見ても有意義なものであると考えられる。ただし、その取り組みは、外部の第三者のみでは為し得ず、容易に行われるものではない。

今回のパンフレットでは、この取り組みに果敢に挑み、加えて観客にすべて提示するという姿勢をとっている。ただの神楽観賞に留めるつもりはない、という意気込みを感じる。

この姿勢は、演目紹介に続く「コラム」でさらに顕著となる。

簡単にイメージされる神楽は、特定の地域や特定の神楽師、とにかく何かしら特別な人々の中で綿々と継承され、特別な神事や何かしら公演の形でときたま外部に示される芸事、と言ったものなのではないか。

今回公演では、その特殊で少し秘密めいた印象があるのであろう神楽が、冒頭の演目紹介からすでに時系列に区切った明文化を経て、神楽師の外から分析される対象として展開されている。これだけでも通常のパンフレットとは一線を画すものを、このコラムでは、演目外に残された秘密、神楽を実行する神楽師について、ここでは

神楽保存会や囃子連であるが、これについてまで整理し提示される。

神楽を研究する好事家ならともかく、居住地域以外の神楽を一般的に楽しむに留めるならば、このような情報に触れることは皆無と言って良いだろう。神楽師側からすれば人員的な手の内をすべて見せる行為であるし、観客としては、神楽に対する幻想という用語弊があるだろうが、しかしそれに近いものを打ち砕かれかねない。それを、この特別公開講座の場で行ってしまう。ただ神楽を見て、珍しい芸術に触れました、では終わらせない企画である。公演パンフレットとしては完全に異質の物だ。

しかし、これが最初から提示されていることで、観客は自分で思ってもみなかった鑑賞ができるかもしれない。ただ神楽を楽しむもよし、分析的に鑑賞するもよし。挑戦的な取り組みであると思うが、読み手に与えた影響とそれの持つ意義はとても大きなものとなったはずだ。神楽研究資料として多大なる意義を持つであろうことについては、言わずもがなであろう。

これに続くインタビューでも、コラムで示された舞い手側について、実情や考え方が公開されてゆく。神事として男性間での継承が多い中、女性が新規加入したことについての聞き書きと記録は、神

楽の世界における新たな変化に対し当事者間で為された転換の一事例としても重要である。このような変化を当事者からの視点で明文化することは、特にこのような伝統芸能において貴重な資料となるだろう。

続く日本舞踏に挑戦する神楽師についてのインタビューもまた同じ性格を持つ。神楽集団として表に現れにくい取り組みが、その内容や当日を含む出来事の記事化、当事者の考えとそこへの期待、またその結果と、取り組みの大部分について、第三者を交え整理され、記録されている。

双コラムは、神楽師によって明文化されにくい、しかし神楽集団としてはおそらく大きな転換点となり得るポイントを整理し明らかにしている。外部から訪ねて行って一朝一夕に理解し文章化できるような性格でもなく、神楽研究の視点からしても容易に成される内容ではない。どちらの視点からしても、その重要性和希少性は明らかである。

これらに加え、インタビュー後者である日本舞踏への試みについては、インタビューの収集者ではない第三者の観覧記が加えられている。

前述したように多大なる意義と重要性を有するインタビュー記事であるものの、やはりインタビューとは話し手と聞き手の中で完結し、内々で展開してゆくものである。本プログラムでは「追記」として補足内容も多く記録されており、事実そのものの記録部分についても充実している。この補足はインタビュー形式での事実提示には重要であり、これによってインタビュー形式での整理への事実裏付けが可能となっている。しかしインタビューの本編としてはどうしても、2者間でのやり取りとしての構成故の主観からの記述が中心となることは避けられない。

ここに、第三の視点による取り組みへの言及が並び示される。この第三者は、神楽師と日本舞踏との交わりを、公演の中そのものの中で感じ取った情報から分析し、記録している。

本パンフレットでは、冒頭の演目紹介を含む全てにおいて、神楽師を中心に据え、その演者と密接な関係を築けた研究者ならではの多大なる成果が提示されている。貴重性、重要性ともに極めて高く、パンフレットに止まらない研究資料としての意義も大きい。この段階から、更に加えて示せる要素があるとするれば、それは第三者、外部からの視点なのかもしれない。

とにかくこの観覧記では、神楽師の視点でも、これに寄り添う研究者の視点でもなく、公演当日を鑑賞した第三者として、実際の動きや演出、演目といった面についての積極的な分析が成される。一個人の観賞記という体裁をとりながら、パンフレットに組み込まれたことにより、第三者視点での記録として小さくない意義を持つものとなっている。

また、「おわりに」では、これまではっきりと姿を見せなかったプログラム作成主体が明らかになる。読み手への紹介としてまとめられた活動経歴・活動内容であるが、プログラムに示された研究内容に添えられたことにより、その研究の成されるに至る経緯や、公演としての活動内容が併記されている。プログラムの形をとっての研究、記録、公開にあたり、取り組みの履歴とも言える記録が添えられることにより、本プログラムはひとつの完結した研究報告となっているように思われる。

冒頭でも記したように、今回の公演観覧者は必ずしも神楽愛好家ではないかもしれない。この講座参加者のうちどれだけの方が、この分量のパンフレットを通読したのかはわからない。しかし、研究的、挑戦的な内容であるが故に、幅広いニーズ、知識欲に対応でき

る冊子となっているように思う。神楽とは、公演で見たあの演目は、と一部のみ活用するのも、全編を通し、神楽に対する分析的視点を楽しむのもまた、特別公開講座としては正答なのではないだろうか。前述しているように研究成果として確実に大きな意味を持つプログラム内容ではあるが、観客それぞれの取り組み方に対応できるという点でもまた、充実したプログラムと言って良い、と感じている。

(草間範子)